

阿波のまちなみ研究会報



2023年1月号

vol.341

■令和5年 新年ご挨拶	2~3
■第48回太鼓樓見聞録	4~6
■大本瑞雲郷別院「碧庵」調査報告書(第2回)		
	7~8
■事務局通信	8

阿 波 の ま ち な み 研 究 会

〒770-0931 徳島市富田浜2-10 (公社)徳島県建築士会

phone : 088-653-7570 fax : 088-624-1710

令和5年 新年ご挨拶

代表幹事 坂口敏司

新年あけましておめでとうございます。本年も「阿波のまちなみ研究会」共々、宜しくお願ひ申し上げます。昨年も一昨年同様にコロナウイルスの感染対策から充分な活動ができずに悔しい1年でした、今年も年明けから第8派の感染が増え始めておりますが、以前のような重症化する人が減り、軽症者や無症状者が増え、感染対策が緩み増加しているのかと思っています。体力をつけて感染しても発病しないよう努力したいと思います。昨年も書きましたが、負けずに元気に頑張りましょう。

昨年も、一昨年同様に充分な活動が出来ていませんが報告と本年の展望を書かせて頂きます。

●阿波学会総合学術調査は、小松島市の総合学術調査の2年目が実施され、社寺建築班では詳細調査を行いました。メンバー全員がそろう日程調整が難しく、執筆担当者の日程に合わせた少数での調査となりました。松島町の地蔵寺大師堂、新居見町の春日神社本殿、田野町の天王社本殿、中郷町の天満神社本殿の4棟を調査しました。残念ながらその内、前2棟の調査しか参加できませんでした。



地蔵寺大師堂 外観



地蔵寺大師堂 内部



春日神社 本殿



春日神社 棟札

私は、地蔵寺大師堂の執筆を担当しました。内容については、後日出版される紀要を読んで頂きたいと思います。

5年度は、佐那河内村の予定です。

●出羽島の建築士会まちづくりハウス

令和3年度に完成したまちづくりハウスは、まち研の見学会を兼ねて布団や食器などを、搬入しました、その後、徳島支部の研修、私が保存審議会に出席したおりに電子レンジを搬入など徐々に整って参りました。今年は、宿泊して研修できればと思います。

次の写真は、5年度に修理される建物で、本会の喜多さんと福田さんが設計を担当されています。

徳島県が開いている漁業後継者を育てる「漁業アカデミー」出身で、出羽島に移住して漁業に従事している若者の住まいです。



●登録有形文化財

昨年は、三好市井川町の「旧熊谷家住宅」と「四国銀行辻支店」の登録有形文化財申請の所見作成に関わることができました。今年度内に答申されることと思われます。定例会で報告できましたが、これからも、このような機会があれば図面や写真などで報告させて頂きます。



旧熊谷家住宅



旧四国銀行辻支店

●最後に

三好市東祖谷山村の重要文化財「木村家住宅」の主屋、インキヨの保存修理工事が始まります、私も、保存修理委員会の副委員長として関わることとなりました、見学会を企画したいと思います、本年も、宜しくお願ひ致します。



太鼓楼見聞録（48）

四国中央市の興味深い重層門 1

川之江城・川之江陣屋と旧一柳氏川之江陣屋裏門(1)
谷中 俊裕（阿南高専）

1. はじめに

2004 年に平成の大合併で発足した四国中央市は、ほぼ旧宇摩郡域に相当する。（別子山村のみ、経済的な結びつきから旧新居郡の新居浜市に編入された。）旧構成市町村のうち、最大の人口を擁する最東端の旧川之江市は、現在でも四県からの伸びる X ハイウェイが市内ですべて交差する交通の要衝であるが、四国の各國からの旧街道も川之江で合流していた。

四国中央市には、残念ながら太鼓楼も太鼓門も存在しないが、今回から何回かに渡り、同市内の興味深い重層門 2 件を中心にそれらに関連した単層門と併せて紹介したい。1 つ目は、江戸初期にごく短期間存在した一柳氏の川之江藩陣屋の二重長屋門の裏門、2 つ目は、旧伊予三島市域寒川町の新長谷寺の望



写真 3: 燐灘の埋め立て地から望む川之江城山



写真 4: 川之江城山北側の断崖(姫ヶ嶽)と山上の模擬建築

この地に初めて城を築いたのは、通説では、延元 2 年（1337）伊予の南朝方の大将河野弾正少弼通政の命を受けた武将土肥三郎左衛門尉義昌（河野氏の支流）であるとされている。（文献 1 161-など）しかし、文献 2（16-20）では、この時期川之江は北朝方の支配下にあり城を築くのは困難で、しかも河野通政の存在は疑わしく、存在するとしても後世の人物だとして、興国元年（1340）得能弾正少弼通時の命によるものだとしている。

別称仏殿城の由来は、天平年間行基が川之江で刻んだという阿弥陀如来像を祀る仏塔（永延元年（987）恵心僧都建立）がこの地にあり、土肥義昌がこれを引き継ぎ、新たに仏殿を城内に建立したことによるという。（文献 1 162-3）この阿弥陀如来像を今に伝えるのが城山東麓の浄土宗仏法寺であ



写真 1: 旧一柳氏川之江陣屋裏門（川之江八幡神社に移築）



写真 2: 寒川町新長谷寺越屋根付長屋門型仁王門

樓風越屋根を乗せた長屋門ベースの仁王門である。城郭ファンの筆者としては、旧川之江陣屋裏門そのものの紹介の前には、川之江城と川之江藩陣屋の情報も提供しておきたい。

2. 川之江城（仏殿城）

2-1. 川之江城の歴史

川之江城は、川之江町字城山の独立丘陵である城山（鷺尾山、標高 62m）に位置する。北面は断崖絶壁で燧灘が麓を洗い（写真 3、4）、中世城郭として格好の条件を備えていた。一方、適度な標高のおかげで、平山城の近世城郭として発展する可能性も秘めていた。旧川之江市域だけでなく、旧宇摩郡内でも最大級の城跡である。

写真 3: 燐灘の埋め立て地から望む川之江城山

写真 4: 川之江城山北側の断崖(姫ヶ嶽)と山上の模擬建築

る。（文献 3 884-5）城郭についての文献では、しばしば「仏殿城」の名が使われるが、表記はバリエーションがあるものの「河江城」「川上（かわのうえ）城」などの名も古くから登場する。筆者としては、川之江市域を代表する城郭の呼び名として、「川之江城」を使いたい。（文献 3 18）

中世の川之江城をめぐっては、土肥義昌による築城の後も、戦が絶えなかった。早くも興国 3・康永元年（1342）北朝方の細川頼元が川之江城を陥れ、逃げ延びた義昌も討ち死にする。その後も細川氏と河野氏の間で川之江城争奪戦が繰り返され、応仁の乱に際しては、細川、河野双方も東西に分かれ争った。応仁の乱後、細川氏の勢力が衰えると、永禄 2 年（1559）細川通薫（みちただ）が川之江城を去り、河野方の土豪の妻鳥（めんどり）助兵衛・采女正友春が川之江城主となつた。天正 2 年（1574）この妻鳥采女が、伊予にも迫らんとする長宗我部氏に内通したため、河野通直は、河上但馬守安勝に命じて川之江城を討たせ、恩賞として河上安勝を城主とした。天正 10 年（1582）長曾我部元親が河上の川之江城を陥れる。このとき、息女の年姫が燧灘に投身したと伝わるのが城跡北面の断崖、姫ヶ嶽（写真 4）である。その後、川之江城は暫時長宗我部の番城になるが、天正 13 年（1585）秀吉の命による四国征伐で小早川隆景が伊予を攻め、川之江城は開城した。四国平定の恩賞として隆景は伊予 35 万石に封じられた。早くも天正 15 年（1587）には、隆景は筑前に転封になり、川之江を含め伊予での治績の詳細は不明だが、天正 14 年（1586）には、十城（川之江城は含まれず）を残し伊予国の諸城の破却を命じている。これを以て、戦国期の川之江城はとりあえず終焉を迎えたと思われる。（文献 1 164-225, 269-77、文献 2 118-9、文献 4 3）

湯築城(現松山市)の小早川の後、国分山城(現今治市)の福島正則、池田秀雄、小川祐忠と、川之江の領有者は短期間で交代したが、関ヶ原の戦後の論功行賞で、西軍に味方した小川は除封され、川之江は伊予松前(まさき)城の加藤嘉明の采地に加えられた。加藤は、豊臣対徳川の合戦に備え、翌慶長 6 年（1601）川之江城の再建に着手した。しかし、折しも加藤は、慶長 7 年（1602）から新城の松山城を建築中であり、その建材を得るためにもあったのか、慶長 16 年（1611）再び川之江城は破却された。大阪の陣直後の慶長 20 年（1615）には一国一城令も発布され、同一藩内の支城としての川之江城再建の道は閉ざされた。（文献 1 303, 307,

文献 2 120-3）その後、松山藩の加藤は寛永 4 年（1627）会津に転封となり、代わって会津の蒲生氏知が松山に入封した。その蒲生氏知も同 10 年（1633）に急死し、蒲生氏は除封された。高松藩松平氏、松山藩久松氏の預かり地を経て、同 13 年（1636）独立藩主として初めて一柳直家が川之江に入封し、一瞬ではあるが、藩主の居城として川之江城再建のチャンスが訪れる。しかし、同 19 年（1642）藩主の急死による減封により、川之江領は幕領に組み込まれ、再建はかなわなかった。川之江城の再建は、結局、現代の川之江城まで待つことになる。

川之江城が廃城になったと言っても、小早川による城割から加藤による再建までと慶長年間の城割から一柳氏入封に際して城下に陣屋が新築されるまでの間も、何らかの政庁の建物は山上に残されていた可能性はある。

廃城後、特に近代に入ってからは、城山は住民に親しまれた。大正期には吉野の桜が植えられ、昭和初期から園路等も整備され、公園化、観光地化が進んだ。昭和 35 年には動物園まで開設された。（文献 5、文献 6）一方、大正時代まで、城山には巨石の石垣が残されていたが、新港や堤防建設のために使われたという古老的の談もあり（文献 3 148）、開発と並行して遺跡の破壊も進んだと思われる。昭和 59 年、市制 30 周年記念事業として城山公園整備事業が始まり、同 61 年山頂の郭に模擬天守が完成した。城郭建築の権威、藤岡通夫博士の指導を受けた、RC 造 3 層 4 階地下 1 階の、入母屋二階殿舎に入母屋望楼を乗せる犬山城風天守である。（これに類する模擬天守は、戦後大流行し、富山城、館山城など、枚挙に暇がない。）天守に続き、涼（すずみ）櫓、榊形を伴う櫓門、隅櫓なども新造された。（文献 6）

2-2. 川之江城の遺構

公園整備開始に先立ち、同年山頂部の遺構の確認調査が行われた。その概要が文献 4 である。この文献には含まれていないが、同調査に際して作成されたと思われる山頂部の遺構の概略図が図 1 である。（出典元の所在は市教委の文化財係でも確認できなかった。）石垣遺構の表示がないのが残念であるが、周囲を帶郭で囲まれた少なくとも二段の郭を認められるように見える。再頂部は空堀で二分されている。

この図とほぼ同範囲の現状図が図 2 である。両図で、野面積の石垣遺構の写真（写真 5-7）の撮影場所

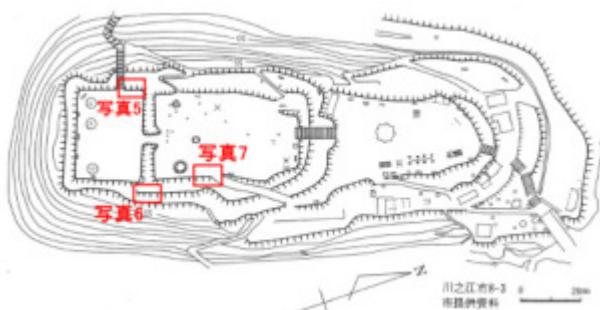


図 1: 城山公園整備事業(昭和 59 年～)直前の川之江城跡
山頂部(通称本丸、二の丸部分)詳細図 (文献 7 141)

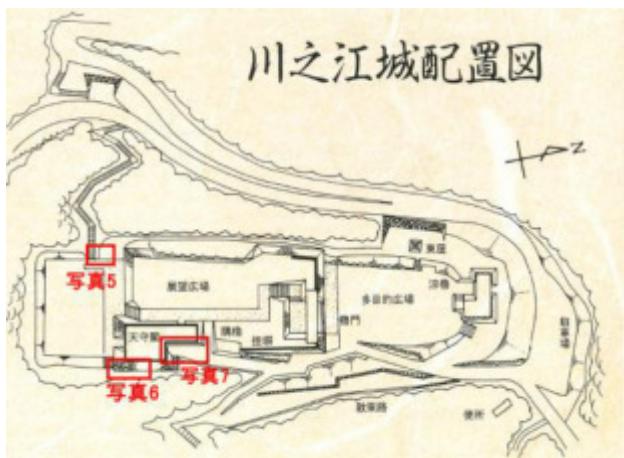


図 2: 現在の川之江城跡山頂部の建造物群 (文献 6)



写真 5：西側から通称本丸への上り口残存石垣と模擬天守

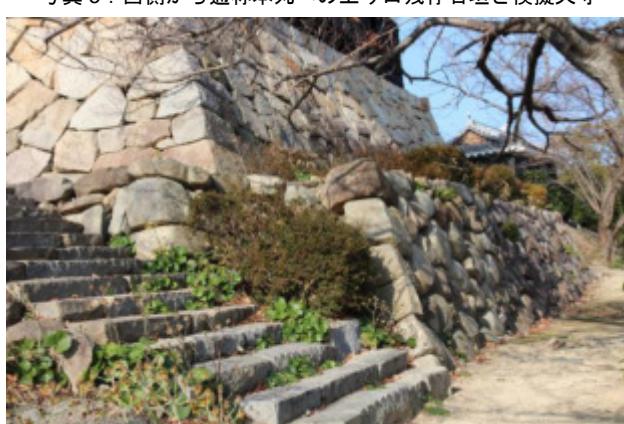


写真 6：通称本丸東側帯郭残存石垣と模擬天守の新造石垣
を示している。現在残る真の遺構である野面積の石



写真 7：通称本丸西側残存石垣と帶郭 石垣上に模擬天守付櫓
垣は加藤嘉明による再建時のものである可能性が高い。
昭和時代には、多くの城跡で、観光目的で、
残存遺構を破壊して模擬天守が新造された。これに比べると、川之江城跡で残存している石垣を観光用模擬建築の石垣とはっきり区別できるよう共存させて
いるのは、良識的な手法と言える。埋め戻されている
遺構も多いようだ。

山頂部の遺構の北側には、三の丸と通称される
大きな広場があるが、これが城郭遺構である確証はないが、文献 2 (134) では、馬場（馬の調練場）の跡
ではないかとしている。山頂部の二段の郭と併せて
一二三（ひふみ）段の連郭式縄張が想定できるかも
しれない。



写真 8：川之江城跡城山公園全山の案内図 (文献 5)
次回は、川之江陣屋とその移築裏門を紹介したい。
参考文献

1. 森実善四郎 (1989) 『川之江郷土物語』、川之江商工会議所.
2. 信藤英敏著刊 (1982) 『川之江城の研究』.
3. 川之江市誌編さん会編 (1984) 『川之江市誌』、川之江市
4. (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編刊 (1984) 『弘殿城跡—埋
蔵文化財確認調査報告書—』.
5. 四国中央市役所都市計画課「城山公園の紹介」、
<https://www.city.shikokuchuo.ehime.jp/soshiki/30/3618.html>
6. 四国中央市役所観光交通課 (発行年不明) 『川之江城』、川之江
城天守閣の配布物.
7. 愛媛県教育委員会文化振興局編(1987) 『愛媛県中世城館跡分布
調査報告書』、愛媛県教育委員会.

大本瑞雲郷別院「碧庵」

調査報告書（第2回）

2. 建物概要

名称 大本瑞雲郷別院「碧庵」

所在地 小松島市金磯町1-56

管理者 多田 宗篁

家柄 郷士（名主庄屋）

建築年 江戸時代後期（約二百年前）

改修年 昭和三十五年（平屋部分建て替え）

設計・施工 中村為七（為斎：京都の数寄屋大工）

この建物を家族は御殿と呼んでいるが、本席である「碧庵」が建物全体の呼び名として使われ

ている。二階建て部分は江戸時代に藩主蜂須賀公の避暑目的に造られたと伝えられており、藩主お気に入りでよく訪れていたそうである。待合の縁側前には藩主の駕籠を駐める敷石「カゴオキイシ」がある。

部屋

1階：待合：「瞳々」：八畳

寄付：四畳

茶室1畳台目「玉壺（ぎょっこ）」

水屋

玄関

茶室：三帖台目「碧庵（へきあん）」

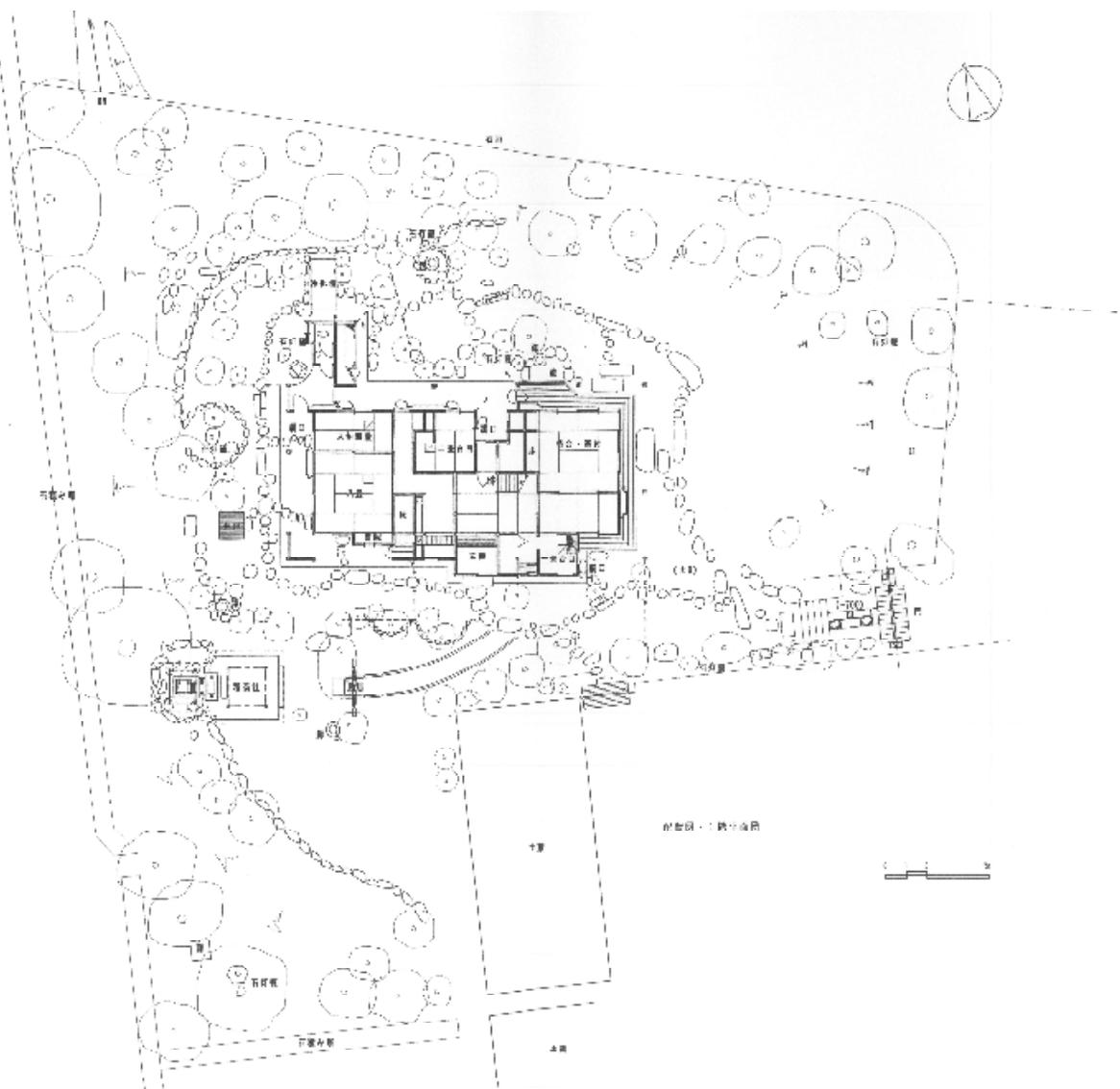
茶室：八畳「清泰（せいたい）」

茶室：大炉四帖

2階：六畳

四畳半

三畳





建物西側より八畳を望む

【事務局通信】

令和4年11月例会の報告

◇令和4年11月18日(金)17:30～
建築士会会議室
まち研だより発送作業：坂口、丸山、島田

◇例会 令和4年11月18日(金) 18:30～21:00
参加者：坂口、谷中、林、
丸山、島田

令和4年12月例会の報告

◇令和4年12月15日(金) 17:30～20:30
パークウェ斯顿ホテル (建築士会祝賀会)

◇建築士会祝賀会と重なったため、中止となりました。本会会員の林正敏氏が旭日双光章、喜多順三氏が国土交通大臣表彰、鎌倉和敏氏が徳島県知事表彰を受賞されました。

令和5年2月例会のお知らせ

◇令和5年2月17日(金)18:30～
建築士会会議室

◇まち研だより発送作業はありません。

編集部から

☆明けましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。



☆引き続き原稿を募集しています。送付は以下のアドレスまで
Mail to: m-style@mb.pikara.ne.jp

《まち研だより》2023年1月号 VOL.341号
発行日 令和5年1月20日(金)
発行 阿波のまちなみ研究会
〒770-0931 徳島市富田浜2丁目10
(公社)徳島県建築士会
TEL. 088-653-7570 FAX. 088-624-1710

代表者 坂口敏司(坂口建築設計室)
事務局 真鍋憲資(studioKEN) 088-635-4272
studionken@mc.pikara.ne.jp
編集者 島田めぐみ(M-STYLED 設計室)
谷中俊裕(阿南工業高等専門学校)